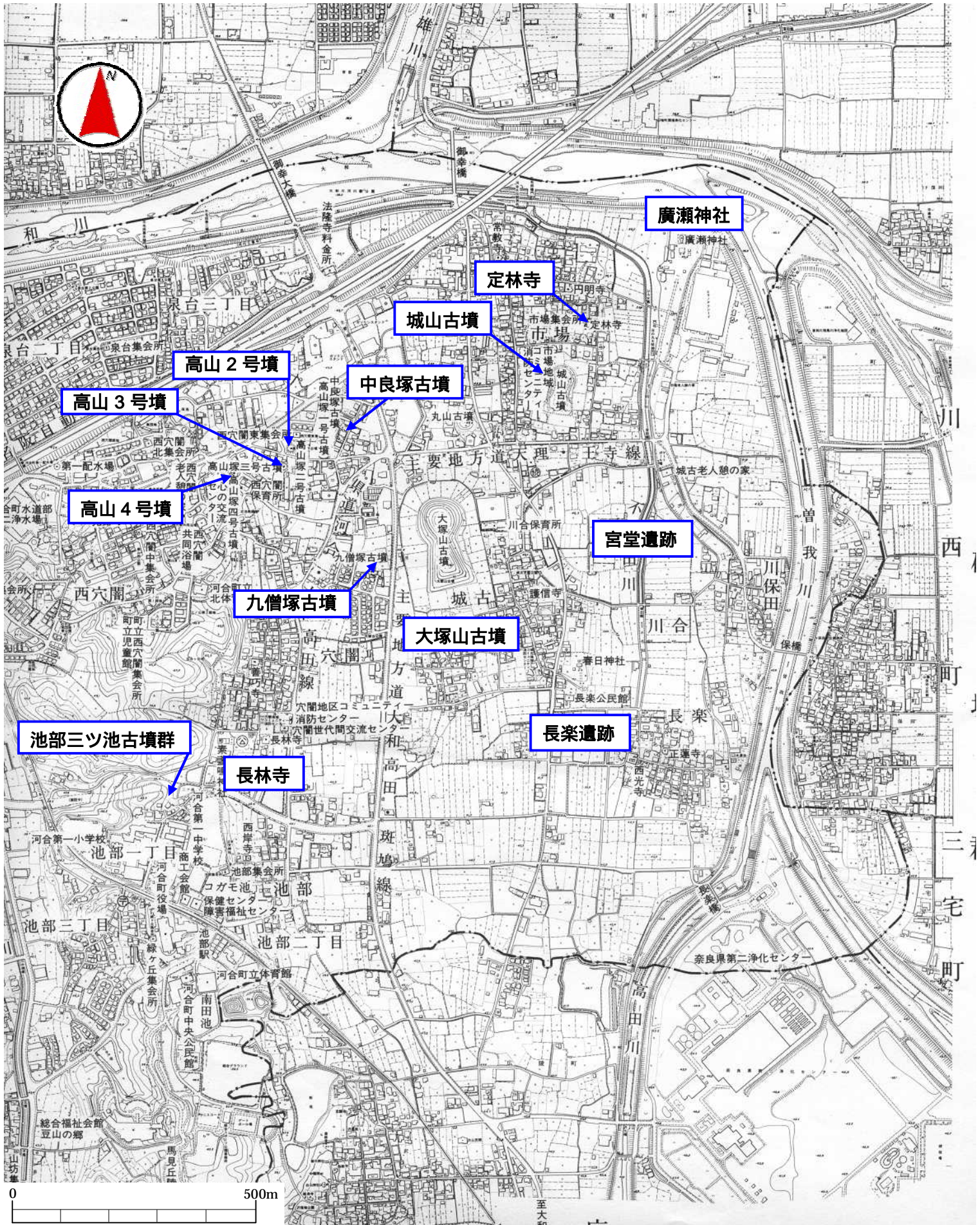


河合町北東部の文化財案内



いけべみついけこふんぐん 池部三ツ池古墳群

所在地：池部字三ツ池

種別：古墳

時代：古墳時代後期～終末期

規模：1号墳、直径10mの円墳

石室 全長3.6m以上・幅1.3m

2号墳、直径8.5mの円墳

石室 全長2.8m以上・幅1.05m

平成18年3月（第1次調査）及び6月～8月（第2次調査）に発掘調査を実施し、確認された古墳群です。池部では明治年間に現在の町立体育館付近で石棺が見つかったようですが、本格的な発掘調査による確認は初めてです。今回の調査では2基の古墳を確認しています。また、調査地の西側には古墳かどうかよくわからない古墳状隆起がありますが、今回の調査の結果から、これも古墳の可能性が高くなりました。

1号墳の墳丘は後世に掘削された溝のために正確にはわかりませんが、直径10mの円墳と推定されます。埋葬施設は横穴式石室で、ほとんどの石材は抜き取られていましたが、その痕跡からおおよその大きさがわかります。南に開口した石室の大きさは幅1.3m、長さ3.6m以上の規模であったと思われます。石室内や西側の周溝から須恵器の他、土師器碗や瓦器が多く出土しています。このことから、平安時代から鎌倉時代にかけて石室を再利用していたと考えられます。

2号墳は一辺8.5mの方墳、または直径8.5mの円墳。墳丘の東側と西側は直線的ですが、北側は円形に溝を掘り込んでいます。埋葬施設は横穴式石室と思われませんが、石材は全て抜き取られていました。石室の大きさは幅1.05m、長さ2.8m以上と推定されます。石室内から須恵器高坏や鉄釘が出土しました。1号墳のように後世の遺物がほとんどみられないことから、中世に再利用されることなく長らく埋もれていて、近世になって石材抜き取りのために乱掘されたのではないかと考えられます。

2基の古墳の石室はともに南に開口していました。

1号墳は6世紀後葉から末葉の築造。2号墳は7世紀初頭から前葉の築造と推定されます。また、1号墳の西側の古墳状隆起は古墳であるなら、1号墳より古い古墳である可能性があります。

池部三ツ池古墳群の北東側に古代寺院の長林寺があります。長林寺は聖徳太子建立と伝えていますが、7世紀前葉にはまだ小堂があった程度と考えられ、2号墳の被葬者が関わっているのではないかと推定されます。長林寺の伽藍が整

うのは2号墳の被葬者の次の世代の頃だと考えられます。

1号墳の南西側にある古墳状隆起の東側から出土した異形須恵器は、全国的にも類例の少ない須恵器です。上部は失われていますが、筒状のものが付いていたのではないかと思います。



池部三ツ池古墳群航空写真(北から)



池部三ツ池古墳群と
周辺の遺跡(南西か

池部三ツ池古墳群
(西から)



1号墳西側出土
異形須恵器

異形須恵器出状況

ちょうりんじ
長林寺

所在地：^{なぐら}穴闇字瓦ヶ谷・大門

種 別：寺院跡

時 代：飛鳥時代～

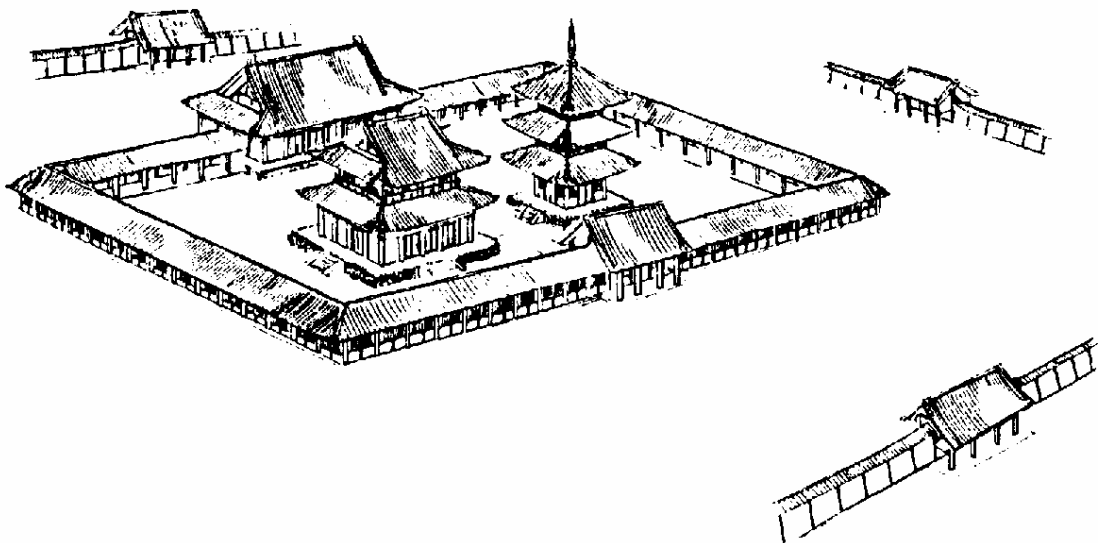
規 模：東西約 100m×南北約 100m

聖徳太子の建立と伝えられ、現在は江戸時代末の建物が残っています。現在の長林寺の庭には塔心礎があり、周辺には金堂の基壇や礎石が残っています。

発掘調査により、金堂基壇、講堂基壇、中門基壇、回廊礎石が確認され、長林寺は斑鳩の法起寺と同じ伽藍配置（「法起寺式伽藍配置」）であることがわかりました。

聖徳太子が活躍した飛鳥時代前期には何らかの建物があったようですが、全ての伽藍が整備されたのは聖徳太子の死後、7世紀後半（白鳳時代）のようです。6世紀後葉から7世紀前葉にかけて池部三ツ池古墳群が形成されており、この古墳群の被葬者が長林寺の創建に深く関わっているものと思われます。

また、「長倉寺瓦」銘のある瓦が出土し、古代には長倉寺と呼ばれていたことがわかります。現在の穴闇（なぐら）の地名はこの長倉の転訛と考えられます。



長林寺想定復元図(南西からの俯瞰)



発掘調査時の金堂基壇写真(北から)



基壇西面の瓦積み



塔心礎



「長倉寺瓦」銘丸瓦



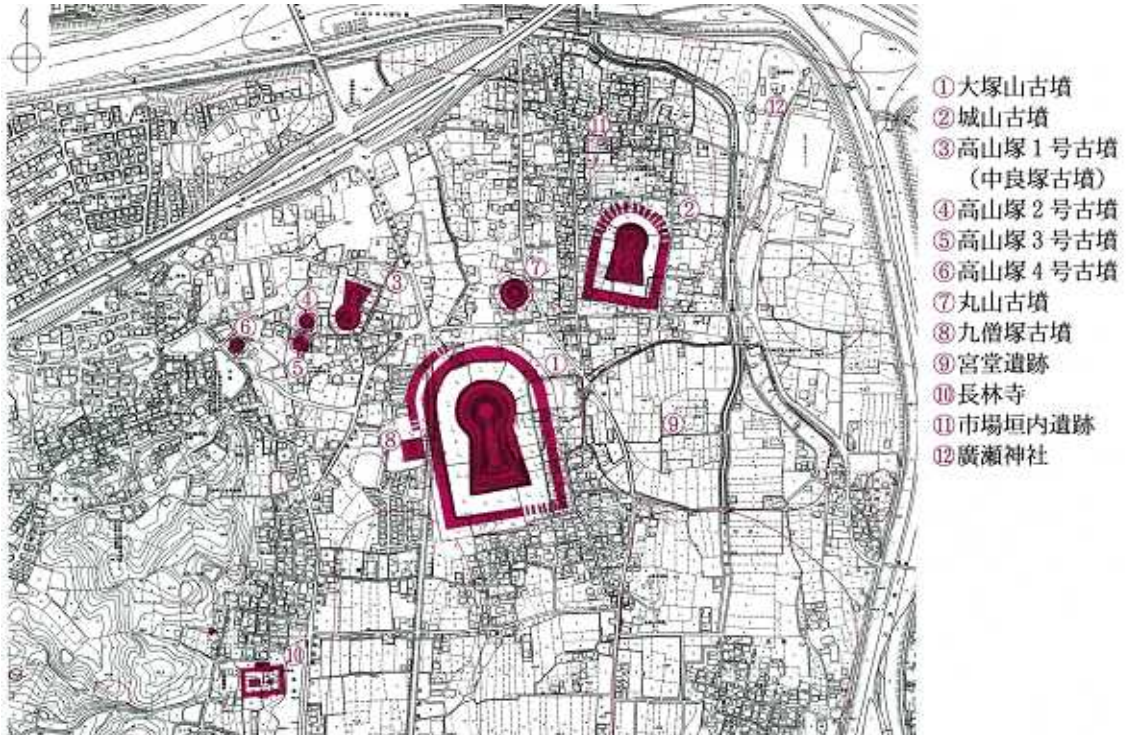
出土瓦(軒丸瓦の瓦当)

大塚山古墳群 (国指定史跡) 昭和31年12月28日指定

奈良盆地の諸河川が合流する地点の南側、馬見丘陵の東北の平野に前方後円墳3基、円墳4基、方墳1基の計8基の古墳からなる大塚山古墳群があります。

この古墳群は5世紀後半から6世紀前半までの短い期間に次々と築造された古墳群で、8基の古墳が一括で国の史跡に指定されています。

現在残っている古墳以外にも、この周辺には複数の小規模な古墳があったものと思われます。



大塚山古墳群と周辺の遺跡分布図

大塚山古墳群航空写真
(平成2年2月撮影)



中良塚古墳 (国指定史跡としての名称は 高山塚1号古墳)

所在地：穴闇字中良塚

種 別：古墳・前方後円墳

時 代：古墳時代中期(5世紀後葉)

規 模：墳丘全長約88m、後円部直径約45m、後円部高約6.5m、
前方部幅約50m、前方部高約6.5m、
周濠幅約10m(前方部北側)・約18m(西側くびれ部)

中良塚古墳は、川合大塚山古墳の北西に位置する墳丘の全長が88mのやや小さめの前方後円墳です。大塚山古墳・城山古墳とは異なり、前方部が北向きになっています。墳丘は2段築成の状況がよく残っています。墳丘の周囲には周濠が巡り、平成5年度の発掘調査で外堤の存在が明らかになり、外堤内側の葺石が検出されました。

遺物は円筒埴輪の他、朝顔形埴輪・家形埴輪・盾形埴輪・蓋形埴輪等の埴輪と須恵器が出土しています。埋葬施設に伴う遺物は知られていません。

「中良塚」という名は「ナカラヅカ」がなまったものと考えられます。地元では「盆山(ぼんやま)」とも呼ばれています。



中良塚古墳測量図



中良塚古墳(西から)

周濠部葺石
出土状況

たかやま2ごうぶん
高山2号墳

(国指定史跡としての名称は 高山塚2号古墳)

たかやま3ごうぶん
高山3号墳

(国指定史跡としての名称は 高山塚3号古墳)

たかやま4ごうぶん
高山4号墳

(国指定史跡としての名称は 高山塚4号古墳)

所在地：穴闇字中良塚（2号墳）、穴闇字畑ノ前（3号墳・4号墳）

種別：古墳・円墳

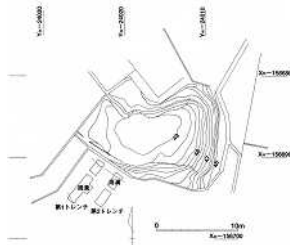
時代：古墳時代中期（5世紀後葉）

規模：2号墳 - 直径約30～35m、3号墳 - 直径約30～35m、
4号墳 - 直径約20～25m

中良塚古墳の西側に点在する3基の小古墳をそれぞれ高山2号墳・3号墳・4号墳と呼んでいます。

このうち2号墳と3号墳は発掘調査により元は直径35m程度の円墳で、周濠が巡ることが確認されています。

4号墳は、現状で約10m程度の墳丘を残すだけです、元はおそらく直径30m程度の円墳であったと思われます。



高山4号墳測量図

注) 2・3号墳と4号墳の測量図の配置は任意です。正確な位置関係を示すものではありません。
縮尺はほぼ同一です。



高山2・3号墳測量図

2号墳からは人物埴輪の腕が出土し、大塚山古墳群内での人物埴輪の成立を
考えるうえで貴重な資料となりました。

また、3号墳の周濠から滑石製の勾玉が出土しています。この勾玉は、古墳
が荒らされた際に周濠部分に紛れ込んだものとも考えられますが、周濠に撒い
て行った祭祀に使用されたものとも考えられます。

高山2号墳から出土した人物埴輪の腕は手首に環をしています。曲がる角度
などから巫女形埴輪の右腕と思われます。

高山2号墳の築造方法は、核になる小さな墳丘をつくり、その核を覆うよう
な形でさらに盛土をしていくという墳丘構築の様子がよくわかります。

現在は崖状になっていた部分に新たに盛土をして墳丘を保護しています。



整備前の高山2号墳墳丘盛土の状況



高山2号墳出土人物埴輪



高山3号墳出土滑石製勾玉

大塚山古墳 (他地域の大塚山古墳と区別するため「川合大塚山古墳」とも呼ばれる)

所在地：川合（城古）字大塚山・池田・居場垣内・城古垣内・西城垣内・
木戸ノ池・カツラ・柿木原・大西

種 別：古墳・前方後円墳

時 代：古墳時代中期（5世紀後半）

規 模：墳丘全長約 197m、後円部直径約 108m、後円部高約 15.8m、
前方部幅約 110m、前方部高約 16.4m、周堤幅約 20m、
内濠幅約 35m（後円部北側）・約 49m（西側くびれ部）・
約 39m（前方部南側）
外濠（外周溝）幅約 15m

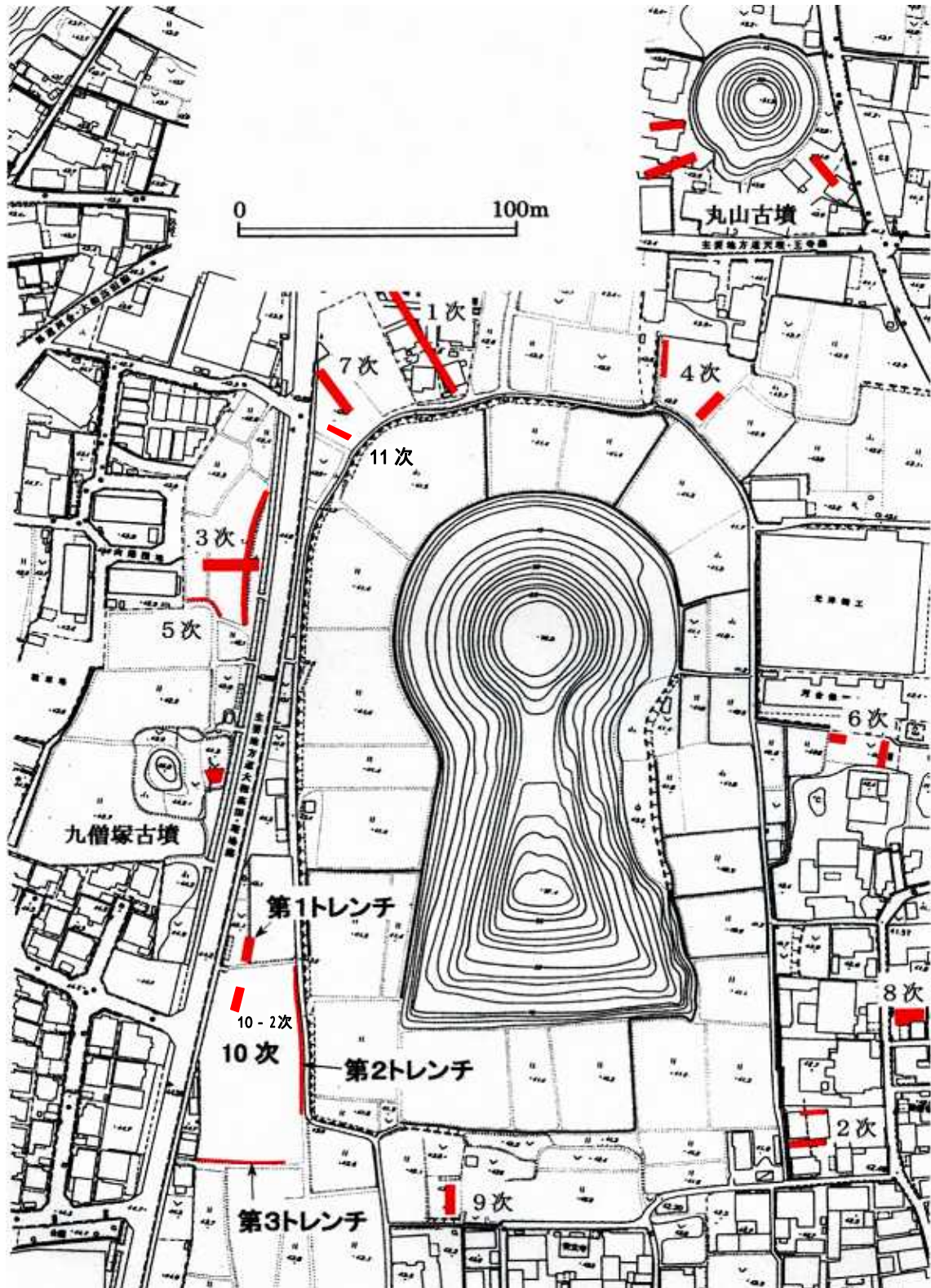
大塚山古墳群の中心的存在である川合大塚山古墳は、全長 197mの規模を誇る奈良県内でも有数の大型前方後円墳です。墳丘の周囲には周濠が巡らされて、三段に築成された墳丘は比較的きれいな状態で保存されています。近年の発掘調査により堤の外に外濠が巡っていたことがわかってきました。

採集された円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪・蓋形埴輪・盾形埴輪や土師器から、大塚山古墳は5世紀後半に造られたものだと考えられています。

埴輪の中には円筒に小型の盾を取り付けた破片があり、家形埴輪の円柱部分と推定されています。また、平成 21 年には人物埴輪（巫女）の左腕と思われる破片が出土しており、人物埴輪の古い資料として注目されます。



大塚山古墳航空写真(北西から・平成12年5月撮影)



大塚山古墳発掘調査地位置図



大塚山古墳出土人物埴輪



大塚山古墳前方部墳頂の明治天皇記念碑

く そうづか こふん
九僧塚古墳

所在地：穴闇字松ヶ下

種 別：古墳・方墳

時 代：古墳時代中期（5世紀後葉）

規 模：一辺約35m

現状では東西約27m、南北約33m、高さ約3mの方墳で、川合大塚山古墳の周堤西側、外濠に接して築造されています。元は一辺35m程度の規模であったようです。大塚山古墳と計画的に配置され、独立した古墳ではなく、大塚山古墳に伴う鉄器等の副葬品埋納のための墳丘と考えられます。現状では2段に造られている様子が観察できます。墳丘への立ち入りはご遠慮ください。



九僧塚古墳航空写真(垂直)

まるやまこぶん
丸山古墳

所在地：川合（城古）字丸山
種 別：古墳・円墳
時 代：古墳時代中期（5世紀後葉）
規 模：直径約48m

川合大塚山古墳の北方、川合城山古墳の西方に位置する直径約48mの大型の円墳です。

全く発掘調査が実施されていないので詳細は不明。古絵図によると周濠が巡っていたようです。

現状では2段に造られている様子が観察できます。墳丘への立ち入りはご遠慮ください



丸山古墳航空写真(垂直)

しろやまこぶん
城山古墳

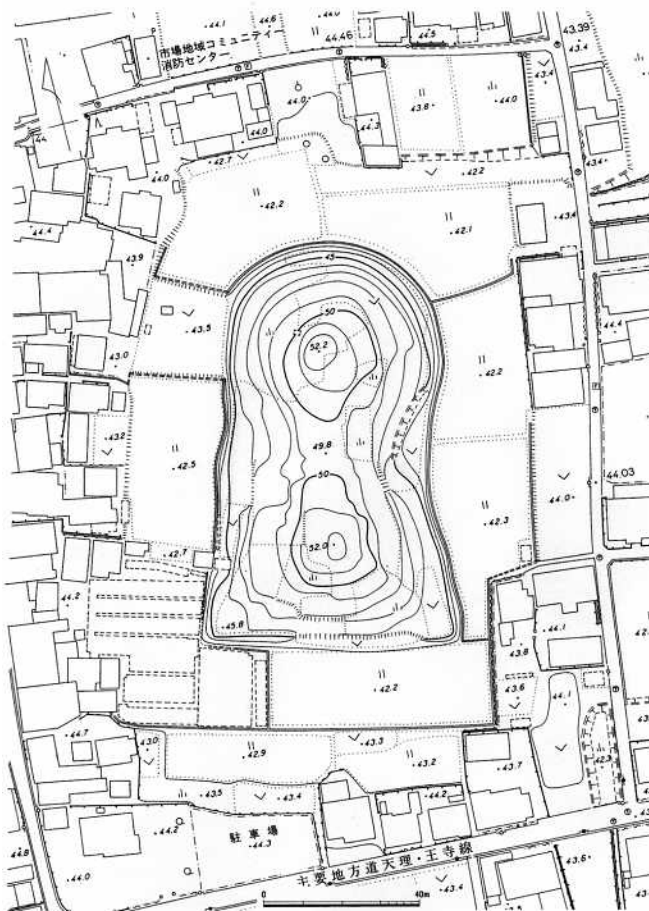
所在地：川合（市場）字城山・山ノ間
種 別：古墳・前方後円墳
時 代：古墳時代中期～後期（5世紀末葉～6世紀初頭）
規 模：墳丘全長約109m、後円部直径約60m、後円部高約10m、
前方部幅約73m、前方部高約10m、周濠幅約20m

川合大塚山古墳の北東に位置する前方後円墳で、全長は約109mを測り、6世紀前半では奈良盆地内では有数の規模を誇る古墳です。

墳丘の全面にわたって開墾されており、段築の状況や外部施設については明らかではありません。埋葬施設は横穴式石室の可能性も考えられますが不明です。

また、墳丘を囲む周濠は今も水田としてその痕跡をとどめています。

中世には城館として利用されていたと伝えられ、城山と呼ばれるようになりました。



城山古墳測量図



城山古墳航空写真(南から)

みやどういせき
宮堂遺跡

所在地：川合（城古）字宮堂・涌田・不毛田

種別：集落跡、

寺院跡？

時代：縄文時代晩期・古墳時代中期（5世紀後葉）～、飛鳥時代～

規模：東西約400m×南北約300m

（主要部・東西約150m×南北約150m）

宮堂遺跡は大塚山古墳の東側に広がる微高地上に形成された遺跡です。平成6（1994）年度の発掘調査により縄文時代晩期（約2,300年前）の縄文土器の破片が数点と多数の石器が出土しています。その他、石器を作るための原石や石核・剥片も多量に出土しており、集落等が営まれ、石器づくりが行われていたと考えられます。石器は二上山付近で採れるサヌカイトで作られています。

大塚山古墳の東側に広がる宮堂遺跡では、古墳時代の竪穴住居跡が発掘調査によって確認されています。また、埴輪の破片や土師器・須恵器・滑石製管玉等が出土しており、大塚山古墳や城山古墳が築かれた時期に、これらの古墳を造った人々が生活していた集落があり、埴輪や鉄製品を作る工房もあったようです。

飛鳥時代の土師器や須恵器も多く出土しており、古墳時代に引き続き建物群が存在したと考えられます。

遺跡の北側にある廣瀬神社に伝わる絵図には、宮堂遺跡の位置に聖徳太子の建立と伝える大伽藍が描かれており、定林寺と呼ばれています。発掘調査によっても、古瓦の破片がわずかながら出土しており、また、礎石があったような話しも伝わっていることから、この遺跡内に大規模な寺院が存在した可能性は高いと思われます。この寺院の創建年代や存続期間については今後の調査に期待されます。



宮堂遺跡航空写真(南から)



縄文土器及び石器



土師器(古墳時代)



鉄滓

滑石製品

宮堂遺跡の主な出土品

ちょうらくいせき 長楽遺跡

所在地：長楽字北浦・西口・半田・川本

種別：集落跡、遺物散布地

時代：縄文時代後期、古墳時代中期（5世紀後葉）～

規模：東西約400m×南北約600m

古くより須恵器等の遺物が多く散布しており、平安時代以降の文献に現れる「小東荘(こひがしのしょう)(庄)」に関する遺跡と考えられています。

平成4(1992)年度の発掘調査で平安時代の帯の飾りである石帯(せきたい)丸鞆(まるとも)が出土しています。

平成17(2005)年度の第3次調査で縄文時代後期の土器や石器が出土し、北側の宮堂遺跡よりも前段階の遺構の存在が窺えます。

また、円筒埴輪や朝顔形埴輪も出土しており、春日神社一帯に古墳があったと思われます。



長楽遺跡出土石帯

いちばがいといせき
市場垣内遺跡

所在地：川合（市場）字市場垣内・新前

種 別：城館跡

時 代：中世

規 模：東西約 46m × 南北約 57m

周囲を濠によって囲まれ、一辺約 40m の方形に区画された遺跡です。伝えによれば、戦国時代の永禄年間に信貴山の松永久秀により滅ぼされた吉田山城主義辰(よしだやましろのかみよしとき)の館があったとされています。発掘調査によっても 13 世紀～15 世紀代に館として活用されていたことがわかりました。



**市場垣内遺跡
発掘調査状況**



**市場垣内遺跡
瓦質播鉢出土状況**

ひろせじんじゃ
廣瀬神社

所在地：川合字久保田

種 別：神社

時 代：古代～

規 模：

『日本書紀』天武天皇 4 年（675）条に記事が見られる廣瀬神社は、奈良盆地の多くの河川が合流して大和川となる水上交通の要衝に位置しています。神社の創建年代は不明ですが、崇神天皇の時代に創建されたとする社伝や地理的条件、周辺の遺跡の状況から、7 世紀以前には信仰の母体となるものがあったと考えられます。

祭神は、主神が大神神の異名を持つ若宇加能売命で水の神、水田を守る神、五穀豊穰の神として厚く信仰されています。

神社に伝わる「和州廣瀬郡廣瀬大明神之圖」には八町四方の四至に鳥居を建てた広大な姿が描かれています。また、本殿は三殿並ぶ姿が描かれ、相殿に櫛玉命と穗雷命を祀っています。永正 3 年（1506）の戦乱により往時の建物は灰燼に帰したと伝えられます。現在に残る最古の建物は、正徳元年（1711）に造営された本殿です。この本殿は一間社春日造の様式をよく伝えるものとして、昭和 63 年（1988）3 月 22 日に奈良県指定文化財（建造物）に指定されています。

毎年 2 月 11 日に行われる「砂かけ祭り」は、豊かな実りを祈願する御田植祭りの一種で、大和の奇祭として知られています。祭りは午前中の「殿上の儀」と午後の「庭上の儀」の二部構成で、それぞれの所作は同じですが、拝殿前で行われる「庭上の儀」の際、豊穰を祈願して、参拝者と田人・牛役が雨粒に見立てた砂を掛け合い暴れるのが奇祭とされる所以です。この砂かけが激しいほど、雨に恵まれ、豊かな実りが訪れると言われています。平成 21 年（2009）12 月 11 日に河合町指定文化財（無形民俗文化財）に指定されました。



廣瀬神社本殿